

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K00754

研究課題名（和文）育児と仕事を両立する保育士の母親としての葛藤調整とキャリア形成に関する研究

研究課題名（英文）A study on conflict management and career development among childcare workers who balance work and childcare as mothers

研究代表者

片山 美香（Katayama, Mika）

岡山大学・教育学域・教授

研究者番号：00320052

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：未就学児を子育て中の保育士200名へのWeb調査の自由記述分析から、業務量の多さ、子どもの体調不良や参観日等で休暇を取得することへの困難が見て取れた。保育士以外の職種の者に比べて、保育士の休暇取得の困難が示された。また、保育士は仕事と家庭の切り分けが難しく、持ち帰り仕事を持たずに子育てを優先すると、業務への不満感に繋がる可能性が示唆された。

また、保育士への面接調査から、子どもの行事や病気等により休暇を取得する際は同僚に申し訳なさがある一方で、将来は支える側になる決意をすることによって、個々のワーク・セルフ・バランス感が醸成され、職場環境の質の向上に寄与する可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

政府は、新子育て安心プランにおいて、令和3年度から令和6年度末までの4年間で、待機児童の解消を目指して、さらなる保育所等の受け皿の確保を推進している一方、保育士不足は深刻な課題となっている。一時離職を経験した保育士については結婚や出産が離職の契機となる場合が多く、女性職としての保育士の特性を反映している（畔蒜，2021）。保育士による子育て支援に関する研究は多数認められるものの、保育士自身の子育ての実態や保育士のための子育て支援についてはあまり検討されていない。

本研究は、政府が推進する保育士が生涯働ける魅力ある職場づくりを推進するための基礎資料を提示する点に学術的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Free description analysis of an online survey of 200 childcare workers raising preschool children revealed the heavy workload and the difficulty of taking time off when a child is unwell or for school visits. This indicated that childcare workers have more difficulty taking time off than people in other professions. It was also suggested that childcare workers find it difficult to separate work from home, and that prioritizing childcare over not taking work home can lead to dissatisfaction with their work.

In addition, interviews with childcare workers indicated that while they feel sorry for their colleagues when they take time off for their children's events or illness, etc., by deciding to be on the supporting side in the future, this can foster a sense of work-self balance in individuals and contribute to improving the quality of the workplace environment.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：保育士 母親 仕事と家庭の両立

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

国立社会保障・人口問題研究所「第15回出生動向基本調査（2015）」によると、結婚前後で就業を継続した妻の割合が初めて7割を超えた。その内、出産後も就業継続した割合は53.1%と増加し、女性の結婚、出産と仕事との両立への意識や行動がかなり変化してきた。さらに、「第16回出生動向基本調査（2023）」では、第1子出産前後の妻の就業継続率は2015～19年では69.5%に達し、5年間で5割台から7割に上昇、その就業継続者の79.2%は育児休業制度を利用していることが明らかにされている。また、「女性のライフコース」の理想像は、男女ともに「仕事と子育ての両立」が初めて最多となった。「少なくとも子どもが小さいうちは、母親は仕事を持たずに家にいるのが望ましい」との回答を上回り、子育て期の女性が仕事と家事、子育てを両立しながら生活することが当たり前前の時代が到来している。

このような女性の社会進出に伴う共働き家庭の増加は、待機児童問題という新たな社会的問題を生み出し、保育士の確保が喫緊の課題となっている。保育士の就業状況としては、毎年、資格取得者の内の半数に満たない者しか専門職に就かない上に、就職したとしても平均勤続年数は8年に満たない。現場は経験年数10年未満の比較的経験年数の浅い保育士が56.4%（平成25年社会福祉施設等調査）を占めるなど、保育士が長期的に就業することが容易ではない状況にある。指定保育士養成施設である短期大学の卒業生を対象とした調査（澤津ら2016）によると、離職理由は「結婚（33%）」が最も多く、「妊娠・出産（21%）」、「仕事量が多い（17%）」、「勤務時間が長い（15%）」、「給与が安い（14%）」と続く。保育士が妻、母親の多重役割を避け、離職の意思決定をしていることが分かる。

親としてわが子を子育て中の保育士の場合、保育の専門性としての他者の子どもを育てるという職務と、母親としてわが子を育てるという私的な営みとの間で時間的、物理的制約が生じる中、誰の保育を担当するのかという葛藤を生じやすい特殊性がある。この葛藤の調整が両立の条件であるが、「子育てを優先する」決断により、就業継続が断念されることも少なくないというのが現状である。保育士確保のためには、とくに子どもの発達が著しく、母親としての役割意識も形成途上にある妊娠期から育児期に至るプロセスにおいて、どのような葛藤を経験し、その葛藤を調整して就業継続の意思を維持し続けることができるのか、子育てを専門的な生業とする保育士の母親意識を尊重した心理的プロセスを明らかにする必要があると考えた。

保育士の長期的なキャリア形成の実現には、多様な立場の保育士の受け皿となる保育現場の存在が不可欠であろうが、両立を支える家庭環境の研究に比して、職場環境の認知を検討した研究は少ない。妊娠中や幼い子どもを育てる保育士は勤務状態が不安定になりがちである。周囲の同僚及び上司の理解や協働的な職場環境が就業継続への意欲を高め、ひいては保育の質の向上にも寄与することが予想され、検討を試みることにした。

2. 研究の目的

本研究の最終目的は、次に示す3つの研究目的の達成により、子育てと家事、仕事を両立しながら就業継続を実現している現役保育士が、母親として生じる葛藤をどのように調整しながらキャリア形成を遂げているのか、そのプロセスモデルを構築し、母親役割を尊重した子育てと仕事の両立支援の方策を見出すことである。

(1)妊娠・出産期、育児休業期、復職前後期、育児期早期にある保育士を対象に短期縦断的な事例研究を行い、育児や母親としての意識と仕事との間で生じる葛藤の実態と調整のプロセスを検討する。

(2)育児経験のある現役保育士を対象に、妊娠期から育児期に至るまでの母親としての意識や育児と仕事との間で生じる葛藤及びその調整のあり方を調査し、キャリア形成への課題を検討する。

(3)現役保育士を対象に、妊娠期から育児期にある同僚への意識と協働の実態及び課題を検討する。

3. 研究の方法

【研究1】 郵送法によるアンケート調査

中国地方の3県の認可保育所302園に研究の主旨を記した文書を添えて調査用紙を郵送し、子育て経験のある保育士へ協力を求めた。回答は無記名とし、回答済みの調査用紙は、同封した返信用封筒によって園ごとに返送した。

調査項目としては、30項目7件法の「保護者支援力尺度」、13項目5件法の「親アイデンティティ尺度」、10項目5件法の「保育者効力感尺度」であった。その他として、現在の年齢、性別、所属園種（公立／私立）と就業形態、保育経験年数、担当している園児の年齢、役職、我が子の人数や年齢に関する回答を求めた。さらに、「親であること／保育士であること」の二重役割に関する自由記述式の項目を設定した。

【研究2】 事例研究

未就学児を育てながら保育士としての勤務を継続している女性保育士（1名）を対象に半構造化面接調査を実施し、妊娠・出産期、育児休業期、復職前後期、育児期早期における育児や母親としての意識と保育士としての仕事との間で生じる葛藤の実態、及び調整のプロセスについて聴取した。

【研究3】 インターネットによるアンケート調査

現在未就学児を育てている現役保育士、及び一般職の子育て中の女性を対象に、妊娠期から育児期に至るまでの母親としての意識や育児と仕事との間で生じる葛藤及びその調整のあり方、同僚への意識と協働の実態を含めてインターネットによるアンケート調査を実施した。

4. 研究成果

【研究1】

142園（回収率47%）、747名の保育士から回答を得た。回答に不備のあった16名分を除外し、731名（女性）分を有効回答として分析対象とした。

保育士が親になる経験は、仕事と家事及び子育ての狭間で思い通りにいかないという葛藤を抱えながらも、親アイデンティティ、保育者効力感、保育経験年数が保護者支援力に影響を及ぼすことを想定した因果モデルを構成し、共分散構造分析による検証を試みた。その結果、想定した因果関係全体のモデルの適合度指標は、 $GFI=.94$ 、 $AGFI=.90$ 、 $CFI=.94$ 、 $RMSEA=.09$ であり、規準に照らしたところ、モデルの妥当性は許容範囲と判断された。モデルが示す因果構造から、親になる経験は、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育行為を取ることができるという信念」と定義される保育者効力感（三木・桜井、1998）に影響を及ぼすことが明らかになった。

保育士として親になって良かったことに関する自由記述の質的検討については、親としての経験が保護者支援にどのような影響を及ぼすと認識しているかを検討するため、文章完成法の手法を援用した「①保育士として親になって良かったことは」に続く自由記述式の回答を質的に分析した。被調査者731名の内、56名が無回答であった。回答のあった675名の回答をKJ法的手法により記述された1文ごとに切片化した後、さらに複数の意味内容を含む文章を意味ごとに切片化した。その結果、回答した675名の内、「保育が子育てにとって良かった」という観点から記述した者が299名、「子育てが保育にとって良かった」という観点から記述した者が376名であった。本稿では、後者の「子育てが保育にとって良かった」という観点から記述した376名分の回答のみ分析対象とした。

「子育てが保育にとって良かった」という観点からの記述を意味内容ごとに切片化したところ、414の切片が抽出された。1名の記述の中に複数の観点の記述があった場合は、複数の意味内容を各々切片化したため、回答者の人数より切片数の方が多結果となった。抽出した切片を類似した内容ごとにまとめる手続きを繰り返した結果、「親／保護者支援の視点」「子ども／保育の視点」「保育士及び親の複眼的視点」「その他」の4つの大カテゴリーが析出し、さらにその具体を示す内容を纏めて小カテゴリーを作成した。作成した分類基準に沿って、第一著者と発達心理学を専門とする研究者とで414の切片を分類した。意見が異なった場合は協議の上、分類を行った。その結果、4つの大カテゴリーを析出した。

1つ目の「親／保護者支援の視点」のカテゴリーは、親や保護者支援の視点に着目した記述で構成した。「保護者の親としての悩みや気持ちが分かる（保育経験年数10年、3歳及び1歳の子ども有）」のような「親の心情理解」や「保護者の気持ちを分かっていたつもりだったが自分も親になることで親の大変さに共感できるようになった（保育経験年数15年、16歳、14歳、10歳の子ども有）」というような「親への共感」等、親になることによって親の内面の理解や親に対する関わりの変容が生じたことについての記述が認められた回答を分類した。

2つ目の「子ども／保育の視点」のカテゴリーは、子どもや保育の視点に着目した記述により纏めた。「子どもの気持ちをより一層身近で感じる事が出来る（保育経験年数6年、9歳及び4歳の子ども有）」のような「子どもの心情理解」や「子どもが小さい時などにかかる病気や症状など、自分の子どもが経験して具体的に理解できた（保育経験年数20年、17歳、12歳の子ども有）」というような「子どもの体調／病気理解」等、子ども理解や個々の成長プロセスを理解した子どもとの関わりの変容を挙げた回答を纏めた。

3つ目の「保育士及び親の複眼的視点」のカテゴリーは、「保護者の立場から見る事が出来るので自分の保育をあらためて考えさせられた（保育経験年数18年、20歳、16歳の子ども有）」のように、保育士としての親の視点への着目、親であるという当事者性を有した保育士としての視点への着目、保育士であり親でもある二重役割をもって保育に臨む複眼的な視点に着目している記述を纏めた。

最後に、「その他」は、忍耐強さや大らかさ、視野の広がりといった人格的な成長に着目した記述や、親として子育て情報に触れることにより子育てに関わる情報に精通したこと、子どもを介して地域との繋がりが深まったことに関する記述等を纏めた。「子育ての経験を生かした発言や提案が職員間で出来るようになった（保育経験年数10年、9歳の子ども有）」のように、親の立場を生かした職員間の連携が可能になったことを示す回答も認められた。

親としての経験は、保育士の支援対象である親の視点に立って親を理解したり、実際の支援へと繋げたりする手立てになっていることが示された。その他、親になることによって、保育士としての成長だけでなく、「視野の広がり」といった自己の人格的成長を認識する保育士の存在も明らかになった。

以上より、共分散構造モデルにより想定した因果モデルから析出されたパス図、及び自由記述の回答から質的分析により見出した4つのカテゴリーには、園で見る子どもの姿とは異なる家庭で生活する子どもの姿や、親にだからこそ見せる子どもの姿を知ること、親の子どもに対する

思いや態度、行動等、身をもって経験することが子どもに対する総合的な理解を深めることに繋がり、園で見せる子どもの姿の理解、それを踏まえた確かなかわりをする事への効力感を高めていることが見出された。親としての経験が保育に有用で多様な視点をもたらす契機となることが示されていた。

【研究2】

未就学児を育てながら保育士としての勤務を継続している女性保育士（1名）を対象に行った半構造化面接調査の結果を妊娠・出産期、育児休業期、復職前後期、育児期早期における育児や母親としての意識と保育士としての仕事との間で生じる葛藤の実態と調整のプロセスについて、保育士という業務の特徴を踏まえながら検討した。

その結果、妊娠中の仕事への取り組み方、職場での人間関係、働き方の変容（行動面及び心理面）、育児休暇中の復職後の生活に向けた準備としては、体調が良好である場合は仕事上の取組みに特変なく、妊娠前と同様の職務を続行していることが分かった。木登りや逆上がり、プール等、保育士以外であれば用心して回避するであろう行動も継続していた。職場の人間関係が良好であれば、体調不良時や検診に際しては、自ら申し出て、業務を交代してもらおう等、上司や同僚から直接的な支援を得ることが出来ることも分かった。しかしながら、この申し出には、上司や同僚に対する申し訳なきを常に抱えることになる一方で、日頃からの信頼関係の下、きっと助けてもらえるという期待と確信があり、その後の業務の遂行に支障を来さないという安心感を持つ職員との良好な関係性が十分条件であることが示唆された。

復職直後の子育て、家事と仕事を両立させる生活については、母乳育児も継続しており、夜泣きもあって疲労が蓄積し、持ち帰りの仕事（指導案など）は最低限こなして子育てを最優先にせざるを得ない時間への限界感と体力、気力への限界感に直面しながら、仕事への意欲の低下を感じていたことが語られた。

仕事と子育てや家事の両立が軌道に乗ってきた時期については、明確な意識や区切りはなく、両立生活を継続する内に、徐々にリズムをつかんでいったとの認識であった。その認識には、次第に夜泣きがなくなり、授乳も必要となくなってきた子どもの育ちに応じ、自身の体力が回復すると共に、仕事への意欲・活力が増す様が推察された。

仕事と子育てや家事の両立の実現において、夫やその他の家族等の子育て支援は望めない状況で、ワンオペでの子育てや家事は過重な負担でもあった。あわせて、母親を求めて泣いているわが子を残して他の子どもの保育に向かう時や、病気のわが子を預けて仕事に向かう時には自分のしていることへの疑念や葛藤が生じ、心理的に苦しい状況にあったが、仕事を継続していることによって社会との繋がりを維持でき、保育士として、社会における自己の存在価値や役割意識を確信することを度々経験することが、セルフケアの機能を担っている可能性が示唆された。また、両立を継続していくなかで、子どもの育ちを実感したり、保育経験を重ねて仕事への見通しがもてるようになってきたり、子育てをする同僚が増えてきたりすることを通して、「今は仕方ない」とある程度割り切って考えられるようになるという自身の認知的な変容も見出された。

職場の環境面においては、子育てをする同僚が増えてきたことをきっかけに、職員間で協力して働きやすい環境を検討して実行する職場風土が培われたことも両立を可能にした要因と言えた。私立の保育所の特性を生かし、異動がなく、長く働き続けられる職場環境を職員間の連携・協働の下に創り出す意識の醸成も有用と捉えられた。

子育てや家事と仕事を両立するプロセスにおいては、辞職したいと思うことが何度かあったが、継続している現在は、当時を振り返って辞職をしなくてよかったと思えるとの語りもあった。長い保育者としてのキャリアプロセスにおいて、働き方と家庭生活とのバランスを取りながら、両立できるよう工夫する視点を共通認識とし、そのための行動を共有していくことが保育者のキャリアモデルに欠かせないことが明らかになった。

【研究3】

未就学児を子育て中の保育士200名、及び一般職100名に家庭と仕事の両立に関わって、妊娠中から現在に至るまでの両立に関する意識についてWeb調査を実施した。回答に不備のあった保育士の11名分を除外した289名分を分析対象とした。

現在、分析途中であるが、出産後に復職するかどうかを迷う程度については保育士群と一般職群の間に大きな差異は認められなかった。いずれも仕事と両立しながら子育てをすることについては悩みを抱えていることが示された。自由記述の質的分析からは、出産後に復職することを決意した理由として、両群ともに経済的な理由を挙げる者が最も多かった。出産後も夫婦共働きの家庭が半数を超えている現在、女性の自己実現という観点で就業継続の意思決定をするというよりも、夫婦で家計を支えることが自明のことになりつつあることが示唆された。仕事と両立しながら子育てをすることに対する悩みについては、保育士、一般職のいずれにも、母親である自分自身に関連する内容と子どもに関連する内容とが挙げられた。母親自身については、「仕事が忙しくなると、自分に余裕がなくなりイライラしてしまったり、疲れて何もしたくなくなったりしてしまう。持ち帰りの仕事が多く、自分の時間がない」等、時間のなさや疲労感が多く挙げられた。時間的、身体的に余裕のない生活から、平日の切迫感が示唆された。また、持ち帰りの仕事があることは保育士に特徴的な悩みであることが明らかになった。子どもに関連する内容としては、「子どもが体調を崩した時の預け先がほとんどなく、自分が休まざるを得ない。そのため職場に迷惑をかけてしまう。長時間保育園に預けて、子どもが疲れている」等、子どもの体

調不良時の仕事のやり繰りとそれに伴う同僚への申し訳なさ、仕事を持つ親の生活時間に子どもを合わせさせることによる子どもへの負担への危惧感が多く認められた。「毎日が時間に追われていて子どもとゆっくり過ごせない」等、子どもと過ごす時間の確保の難しさも多く挙げられた。いずれも職種による違いは認められず、いずれの職においても母親は同様の悩みを抱えながら両立していることが分かった。また、保育士は保育士以外の職種の者に比べて、休暇取得や、仕事と家庭の切り分けが困難であり、仕事を持ち帰らずに子育てを優先することが業務を全う出来ていないという葛藤を生じさせ、負の自己評価に繋がることも示唆された。

「仕事と両立する上での子育ての工夫」については、職種を問わず、家事に関わることを時間短縮して効率的に遂行したり、平日は家事を最低限にしたり等、家事に関わる達成目標を下げることによって、時間的に切迫した日々の生活を乗り切る工夫をしていることが明らかになった。保育士以外の職種の場合、在宅勤務を導入しているとの回答も認められたが、保育士の場合は職場に出向くしかない上に、一端保育に入ると時間で業務を切り上げることが極めて困難であるため、時間的な制約の中で工夫を求められることが示された。

今後はデータ分析をさらに進め、母親である保育士の仕事と子育ての関係性を具体的に示し、保育士がわが子の子育てと保育業務、それぞれに充実感を持って継続するための支援モデルを構築していくことが課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 片山美香, 大蔵蓮, 梅本菜央, 小林優香, 西山節子, 蓮井和也	4. 巻 182
2. 論文標題 青年期における親性準備性に関する研究動向と保育者が行う子育て支援における課題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岡山大学大学院教育学研究科研究集録	6. 最初と最後の頁 129-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18926/bgeou/64989	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 片山美香	4. 巻 13
2. 論文標題 保育士と親の二重役割から見た保護者支援に対する意識	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岡山大学教師教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 83-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18926/CTED/65066	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 片山美香, 高橋敏之	4. 巻 72 (6)
2. 論文標題 保育士の保護者支援力の認知と親アイデンティティ及び保育者効力感との関連	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本家政学会誌	6. 最初と最後の頁 348-361
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11428/jhej	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 片山美香	4. 巻 8
2. 論文標題 わが国の保育士の私的な子育てをめぐる動向	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岡山大学教師教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18926/CTED/55808	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 片山美香
2. 発表標題 セミナーA 企画：中国・四国支部 保護者と家庭を支援する方法と実践
3. 学会等名 日本臨床発達心理士会 第19回全国大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------